KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

190
2

本伊

大川豊

東京大学

於
190
2

絲櫻春蝶奇縁卷之二

東都　曲亭馬琴　編述

第二段の下

常下曙明ハ庭の莫ふ宿ともあくび。流る月を熟視て忽地嘆息をし
うゞ。良久いとゝ哀訴りてよハ伝るゝ意ふ稱つゞ猛き物を忘ハ為ふ賀ゞ附るふ憂き
良ハせいねゞと慰まてゆうもも笑ぎいる異なる仔細ハ伝ゝ程と変ふ流るゝゝとて
ゝひ出せ一とゝて伝ゝ紙笑茂河ふ投し人を仏つくゝ仇ハ人ゝ者と共ゝ走りゝ
その夜の月も今宵ふ似て傳まゝ去の月去の日ゝ七回ふ當りて伝ゝ今ふ十ゝ
叶の実の節ふわゞとも與ふ死人と誓ひる。ゝゝハゝ不必ゝ生延て伝ゝ
夫ふ程ひとゝらゝゝふ儔ひる死黄ふゝを拳る。こゝゆゝゝ伝ゝ
痛死ハ一ハ知ゝゝふとを死ゝる人の知ゝゝわゞその七回忌ふ精進ゆゝ経を張ゝ

明治　年　月　日　壽贈

番華を手向。跡吊ひぞふゆゑ、ぶとも酒と肉とたらぐ。ゐ身と矣ひ張むさ[illegible]
ゆひゐん。と云つ紀ん今更ふ身れ[illegible]き赤ぞ。ふ[illegible]と罪つ[illegible]と正眞[illegible]
東六い琴絃と且くん抱いとぞ。忽地ふ小勝を掴て呵ととうち笑ひ祝ゐん身ぐのゐ[illegible]
すふ似さまども。それ女の愚痴ふとも彼自物いゐん身ぐ爲ふ元来良人といれわ[illegible]
假初の嫖客めゐ淫酒の爲ふ身を忘れ。逸も術ゐ紀借銭を彼此より債られ[illegible]
ゐ紀きふいまゆ死ん。ゐ身さ一死柳とまゆ。誘ひ巷ゐめふわ[illegible]ゆさ[illegible]彼世[illegible]
いゐ逝ゆの駄賃とゆん。毒を喰ゐん皿を惜む喻ひよ仏ゐる[illegible]ゐ割ゐれ[illegible]件の白鳥い。
ゐ身ゐ爲ふ雙言ゐれ[illegible]自滅するとも悼ふ[illegible]。如此恩ゐ[illegible]く德もゐ[illegible]彼ゐ爲ふ[illegible]
と斷彼ゐ遠忘を吊ふゐ[illegible]ふ浮世の耳ふ壁ふ著。て[illegible]ゐ[illegible]と成人ゐ[illegible]ゐ逃ゐ[illegible]
うとゐ[illegible]ゐん子ども皆も乳と[illegible]れて暑寒をゐ[illegible]ぐきふ小耳ふ[illegible]ん面ぶせゐ忘[illegible]
ても今の若ゐ[illegible]と成宣ふゐ。ゐ[illegible]ゐ[illegible]れて可惜身を解ゐ[illegible]。今

一度とぐさめとて盃を[illegible]ゐ。曙明ふ酌をとり。ゐ[illegible]と受て快げふ。
又呵ゐと笑ふ扨一陣の風颯と吹く。東ちぐゆふ[illegible]る。盃をゐ[illegible]。
燈火一度ふ滅しゐ。夫婦ゐとふ何とゐの。毛骨坐ふ辣ぐゐて。又いゐよりも
なゐゐる。楽場紀て哀れゐる。秋情も殊更ゐて。雪井と渡る雁の掉。ゐ[illegible]
寢床ゐくゐゐゐが綉寢ゐゐん[illegible]ゐて東六い盃盤を納ゐ。碎て卧房へ
入ゐ[illegible]。ゐくて又一句だゐを送る程よ。秋ゐ[illegible]や餘波ふゐゐゐね。頃日ゐ
夜の長て人ゐゐいぐゐゐよ東六ゐ毎ふ鑿劍をゐ[illegible]ふ学れて。夜い
快く祈ゐ[illegible]ゐ。有一夕。物よ驅ゐ学て偽をゐん。曙明い何如ゐ紀ん食い
裳脱の売とゐゐ。彼厠へや登けんとて良くと且紀結ゐどふ。蒸鎮ゐ
あゐゐたゐて男女の密語声とぴいゐゐと舞ゐて。須を歃つ。ゐ[illegible]ん
とゐる寢よゐゐども又睡ゐてそのゐゐのゐゐを[illegible]ぶ。ゐくの如くゐゐと[illegible]

夫物多相類而非也幽蓼之幼也似禾黍牛之黄也似虎白骨疑象武夫類玉此皆似之而非者也

夕ふ及びーうべ。ころふ。ふく疑ひ惑ひて。女房の挙動ふ意をとめく
つ〻くゑるふ叱るべきるのあるあるぬ。女房どもをいて罵りつれは対ーくゆ
ゑろづたーめのごくかゑ〻ぶ。或いはものをふひ白ふ空を瞻仰て門辺ふ立
或いところ浮るゆーあて名紙呼ぶて頻ふい意ぶ。人ふ問ふて動もされば。
辞を失ふと笑ゑう。その為体仇ある人ふこころを惑ー。ふ〻るごくゑ〻
うべ東六ふ〻〻疑念を起ー。通霄陽睡ーて。猝の虚実をまゑ〻やとて。
雁使をあ〻臥せども。ふかくふいぶ〻ゑるくて。熟睡せね夜もるうしうば。朽
木ふるいへべーもあゑ〻ゆ。草を打て蛇ふ驚く。虚
ゆるふよ仰ゑう。ふせんかくせんと肚裏ふて問答ー。やうやく一計を生つ。その
夜さう房の戸尻ふ豆一粒をよーてゑ。結旦ふゆ起て竊ふ伴の豆を
ゑん豆べづつ拾ふるる知よあゑぶ。敷居の溝ふ戸可後方ふあう。原来昨夕も

この戸を開て。曙明へ次の間へ出ゑう。いゑくゑれいはれい又いはゑるくて呼ぶう
けんゆ。ゑゑ〻ぬるゆゑふ。ゑ〻へ胸も寒るぶゑうに。嬢ふ限りゑるれと丸丈
ふ見ぶ。両ふ遍試て張ふせんとべあゑと深念ー。その次の夜も。房の戸
尻へ豆を置て。朝いちんゆ〻ゑ豆ふ入るふ豆いあるべ。知よあゑ。されば昨夕も
出ぶゑうけん翌立の夜ふ又いゑかゑべ。ゑゑゑるゆ。ゑゑ〻ゑ。ゑれども。豆ふ
ゑるべ。知ふありて。開く出ゑるよりふんえぶ。原来ワ計策をゑゆ。ゑ〻戸の
内闇をまゑる後ふ豆をべ又舊のごく。戸尻ふ置ゆ。あゑんごゑんゑ。ゑゑべ術を
ふんとて。此夜ハ一條の髪の毛をりて。彼戸の鈎頭を拉留め天明て竊ふ
ふまべ。拾ゑる毛ハ断離ゑう。ゑゑふ至て東六ハ。曙明ふ密夫ありくゑゑ
熟睡ゑる紙ふて。這奴ハ潔ふ臥房を脱出次の間ふて密夫と楽ゑとゑる
ゑゑゑゆ。と十二ゑふ猜ーゑれどもいまゑ彼密夫を推ゑうと認ゑて。早ゑべ

人は笑もせよかし。奸夫淫婦を押ならべて捕てこそ。といよゝ騒ぞ。次の日の黄昏に曙明に對ひていひけるやう。今宵は門井子の甲乙と里神ならひあるよしなれば誘はれて出るもあれば。衣かさねて出かけて帰るは夜も深るなれば。よく鎖して待かけよと実しやかにいひこしらへて遠く夜裳を脱更。小挑燈を引提つ。宿所を出しかども。元来謀りしことなれば。ゆくこと二三町にして灯を吹滅して立かへりて樹籬の間に躱れて。彼密夫が消息を。今やおそしと待をたり。比は十月中浣なれば月の出るもいと遅くて。往還も殊に稀にして内なる妻が車宿に冬の経営もはかなき如く聞えしが。初更二更と深ゆくまゝに寝よげに臥房に入りぬと覚しくて寂として音もせず。かくて子三刻の比及に潜びてこなたへ来る者のありければ。曳とにもあれ耳を澄して窺ふに。そは隣家の曳の主なり。其名は定かならねども。日来この津の中で常にありし。

人に似たる総角は絶て稀なるよしなれども眼前に密夫が門より入るをさへ見とめて。それを背より差つけて奸賊等と呼びかけて刀を抜て砍んとすれば。得てたえず驚れ双の下をくゞり潜りて飛が如くに逃去る。跡を追て慕ふに。その逃足の疾きこと飛鳥の如く。忽地に見失ひければ。宗内は憤懣にたへず立在て。引提たる灯をとりて見れば。早くも姿は見えずなりぬ。彼密夫を走らしたれば曙明を責問てその名をいはせ。宿所をさるとも。這奴いかで遠くは去べき。且くは身を隠さんと疑ひけれども。妻の罪のみを責て。これを殺さば自ら宗を絶て家を失ふべし。切てもえ去らず妻は人のまへに媒妁ありて娶りし女なれば。とにかくに又人の情妓を騙しつる淫婦の科は。彼のみならず家を挫て臭名をうる

仇なるべし。七子をば産とも。婦に七去あれど。むかしの人はいはずや。彼曙明は朝に源姓を得て。暮に平族と称かへる。浮れ女の果なれば。あるべきことならじ。只何ごともいはずして。猛よとしを逐出しつゝ。その翌を受さし。みづからおもひあふするにおよばじ。と思ひ思ひて只今旅にしたてあつかひしに。門の戸をとくと敲くにぞ。曙明は忽焉と覚えて。阿と叫つて遽しく。指燭して門を開どもすなはち逐ひたれば。いと寒けくもありけん。手足凍めて臥るべきといひつゝ。縮て埋火を発起して爐に炭を継。常にましたる真実しき。あやしくおもひけれども。絶て怒をあらはさず。その夜はおなじ房に臥て。ごろふいよく決断し。次の日早飯果て後に妻をよび。両個の女児を衣装かへて。儀式と形を改て。さて曙明にいひけるやう。曩にわれ汝が為に令を衰て。竊にその自死を救ひ。一下に眠ひし家に伴ひて。恩ひとしを捨るになるほど。情老の怒りを結びて。女子汝より産しけれどもいかにせん。

汝はそや恩を忘れ。愛を移して。某を辱るの。證拠既に分明と信とその罪犯を正すべけれども。その旨あればなほもいはで。汝が恩をもて辞穏便に只今離別するなれば。ものが随意に出去べし。さて両個の女児が両個あるげがなかにとどめんと思へども。七歳未満の女の童。姉妹もろともに父親の手ひとつにはそだちかぬる所為ならずして。小草は幼ければ留め。止以子をば汝に属べし。離別の妻にとらはべき物とてはなけれども。止以子のことも出し遣すべし。とまれ苗字あるものとて圓金三枚許を。離別状の端に包ませる。妻のほとりにおかれけり。良人の面色いと猛く。眼を瞪して歯を切り。衿の間に掌を衝たて臂を張り肩を高くし。疾視つめたる形勢に。曙明は呆果て。回答はなせだにえ瞻る眼中に涙を含み。身はおぼえねどものもいはず。そそろに戯れんとそのが後はかに疑ひ浅くもあるべいにといへる腹立て坐ちまるを。何すこし辨ねど恩を忘れ愛を移ことを。

宣ひまるかとろゆびぶるれ猶ホ浮麻呂ひ。なぐれの末の女まとそ。ぶホ貫いるぶりの公。
ホのと不足ホ小夜辰つまぶかとゆ孫て下幼の男とりまとく緩まぐき。澄揚あぐえ
せのく女房ゐハロゴ隨とりハグ夫のあくひでも。浅きひと水ホ書。文字なくるくホ
孫のなくくハくるはもるぶ罪科を数てりあく去んとハとろ泡ぐ仕ひ。ぶれば
妹役のひそるの。尾上隔る生別まとれたろいとも長ーぶホ。まご肇西もあくぬまを。
南と少ハりぶれて別くゆれくや送されるやつるどろるもひあつせぬ失あぐ勅解
も せん又ぶ花の長ホ愛て。強てりとくハとをちんとあぐ姫さひハ絶て色。その仇人
と正妻に居てけくハそ子どもらグ。乳母ともあて朝夕ハ打火汲水炊もせん。舊里
ゐハ只ひとりの。家兄わまども七八年音耗せ絲ぐ今ゐホ。越路ハ辻ぐー。外
ゆハ歌る為もなき。縁由てろうまぐ。ひたくも捨小ホ鄙出されて止以
子ゐまま。油ひとまんより。夫の刃ホ命を隕ー。死ーて出ゐべるくホ世ぶたらぐた

歎ハせト。かくても思ひかくまぶハ。欲り刺もしるくと口説つ泣つ恨て。
良人の勝ら携ろ考くと。戦まとるると腸廻て向ひく礙と突退る。父グ元久の
連ーさホ小草止以子も清共ホ。一声高くいつと泣。女児ゐハ目もかけど東六ハ
冷笑ひてさそ。ぶ張ーき老狐。むーー夜姦ホ鞍の嫖客を。如此泣て泣せーとん。
いっぐりつまぶ魅ーホん。婦ゆハ七去の罪あり。又三不去あり。その第一ホ。そでゆ堅る
処ありて。後ホ捨す処るぶハ。ぶまを去ぶとりあくーあまど。そハ庸常のるのホとそ。
泡ハその類ひよわぶ。大なる罪ゐまども。りまま又ゆ有あれば明々地よまを
責ぶ。ぶくぶゆも処なくるも。いそるハ離別せぐるん。り強てりグ意ホ悟らぶ。
東六ハけのようーて人ホ面を対ぐー。泡ハ狐を考るのあーねば。かくても尾在
らぶありるん。ゆく出てゆとしとなくぶ。りまをまづ小草を携て。直よりの津と
立退べー。ぶぶ決て回答せよ。と考べく問きて曙明ハ千切の涙を袖ホ堪

ちゝ。ちゝ科いるけまども。良人成まゝ小草に別まて。家をやることも物
くらせん。ゆく鬼こゝたゝん子とちゝ。賀茂河の瀬ゝ投て。そゝく水屑とゝ
の父。助らまゝ恩あゝでおり人ゝ母世の仇ありけん。元もゆくても恨いつ行ゝ
両個の女兒ゞ絆とちゝて今更ゆ形まゝ。身の悪業こを罪ゆけまゝ。
と帯て締びそえ酸鼻る長女の。額髪とつゝ抜ゝ。ゆゝ小草母ハ爹云ゆ叱
らまて。止以子のゝとも遠き縣へ父を灼ゆゆ行ゆ大人ゝう留ゝてゝるゝとゝ。べゆ
草ハゝち点ゝ母さゝ父を灼られゝゝ。いと悲ゝくゝとゝすべし。爹ゝよさのこ叱らずゆ。
母さゝを許て。べ止以子も共ゝ勅解ゆゝとゝ。べ止以子ハ膝ゝ元ゝ。父ゝ對ひて
細小ゝゝを働て酸鼻母さゝと諸共ゆ物ゝゝゆゝゝゝ。べゝと歎ゝく行れゝ。
爹と思てゆゝゆも行まで。母さゝを許ゝひて。爹云姫さゝの孫ともゆとゝ。
ゝたゝゝべ須日買ゝ裸人形爹さゝゆ進ゝゆゝゝゝと同胞ゞ。勅解を泣く母

親ハ胸も砕け腸も断ゝ可よゝと泣流石い推ゝゝまゝ。親同胞ゞ一生の別
まゝとゝゝゝゝよ。勅解られて出ひ久ゝ。爹云ゝ世べかゝまでゆゆ。ゝ玩つ慰ゝい
せゝゆゝ止以子幼稚とゝ。爹云の面影姫ゞ白ゝゝく。恩ゝ小草ゝゝ今胥ゝ。枕
外ゝて涙冷する。ゝゝゝ母ゆゆ親まゝ口さゞ色ゝて憎まゝ。この子どゝら成いゝゆ
せん。いゝゆせんゝて泣べ東ゝゝゝ恩愛の涙い胸まで突かゝれゝゝ止べゝゝ
絆ゞ臆ゝゝる元色ゝゝまゝ。ゆゝ止以子泣ゆ絶て科いゝけれゝゝゝゝゝゝゝ捨
らまゝく且くゝ物憂かゝゝゝ。それゝゝゝゝゝ母の腹ゆ。宿ゝ来る身の元ゝゝゝ
締恨むゝ。とゝゝゝ又母親ゝ須臾も身を離さゝ護身嚢の口を解さて櫻ゝゝゝ
せゝ。三重の印鈴をゝゝ出ゝゝ小草ゝゝゝまゝ成ゝゝゝ。ゝれい吾倅が親の像ゝ
半日ゝゝ。失ゝゝゝゝゝの手来懐ゝ放さゝゝゝゝ三重ゝゝゝゝゝ
べゝ。中ゝ則吾倅ゞ義ゝ。下ゝ止以子ゝゝゝゝゝ羊闌ゝ親同胞環今ゝゝゝ日ゝ。

面影もそれせの印形をあらと共ふ石岩絞せよ。さいくを主人優曇花の花の咲
も散こふ。又来る春ハこのまれぬ。長別離苦の世間と豫てかりこどりこ
きのふけふとハ考うざ。といひかけて又哽くり。分る二ツの印形をハ草止刀る
ふ著る。護身嚢ふ納まべ両個の子どもハ膝を抱て母さまよりの賜し父さ
もこまこ成人のと。後と反して引けうん。そまと教ぐとあるわ人ゆるりせて失ひと
といひ諭もそ母物ものそね。父ハ怒まる声をやり主人益の喞言まどゆ。ぐやらく出
よといそぐせべ曙明ハゆうやくふ。ふ結べる旅衣左ふ止刀る右ふ止まさんゆ〳〵
定める九十一月中旬の同雲ふ。やり捨ぐる別まとり。妹のまるそ出そゆく。母のわと
追ふ長女ひ〳〵ハも共ふと立まくもるまさせぬりめぐと〻居る。父も実ハ冬の蜂。ふろ
流石ふとろ〻〻よと泣ふ母祝ハ呼ぶ〻〻ことりやと呼くえかるしろ思〻まと
ひ〻〻い事の因果憑数月の布故一人が克魅の。かくハ夫婦ふ蛮ハ縁で東六郎ま疑

ハせ。妻を去〻ー子を捨まする。飽ぬ別まも物の怪の。萌をちふ顕ハせー
ことぞ崇のち。先ちべー。

第三段

東海道ふ二兄棄妻を賺を
天龍河ふ十兵衛妹ふ遭ふ

五十四塚東六郎ハ次女止刀子を属て。猛ふ曙明を離別まこれど。人イ
梶潭やでもなくぷろひとろよ物ぜーべ。郷人郷黨の後てこの像の
幸ハ成ちべ。月を経て後ふちまを知て。金鶯ハて商議ー。まづ内室を
追尚ぞハ五十四塚ハ一ハ勧解るしも。その後ふ仇ふ仇ろとて。郷ーく
彼此とその往方を索まけまど。既ふ程経ーるなれべ。食いぐ〻〻〻〻
〻〻〻〻り〻行ふ曙明ぷりひ〻けるく良人ふ逐まー止刀子を携りべ〻〻〻〻
なくも。安濃の津を出れども。投てもくべき歳もあ〻。八幡山麓濃死

洋ふんこう條の妓院ふあり。四紙を引ぜる嫖客ふたふあり。既ふ
六七年を待て。こよてうと憑んハ面倒せり。やや途いと遅なりしも。
故々の又ふ引をとせるべともかくゆしてもひるんさうび越後へ赴んとて。
やうやくうひ決えれども。年来京流よりつる程ハ。籠のるふひとりて。
花街の外ハよくもうんど。浮世ハしや角文字の。勢ふ七年ぶりしゃど。
あ降まる人ふあひやせんと。新橲さふ遠くハ出ざ人ふ。俄頃ふ放まて方
里の逆旅ふ赴けば。野を過ふを越の州ぴが舊里いづまの方に當れりとも
雑ど人ふ問ど遥ふて。伊の相潭んも女見ハ稚。ひとりあくとも憂旅よ。
或ふ止ふて背ふ肩ひ又賺ふ。紙引て是貢ふ問り。秘貢ふ想ひる
艱苦よあふまとり。若狭路を望てて。北國へ入るとも。ちらぢ濃へ
いめれて伝濃より。越後へ赴くとも。ちらどやうしてその次の日菜屋の

洋ふぞ来よりり。この外。海上七里を渡さんば。張府へ。東海道
水行の難義ハ。ふてて。と冒くい。生船候ふ人ふ。罵敝動ひふぞ曙明よ。
てろまるく安ふ次。私ふ乗て可ふんや。乗ざるが可なんやぴ。方を
ひまるぐら決ふ待ふ共。茶店ふ尻をかけるれ。こまも私出をまろ
ふやあふん。曙明がむろひの床ふ。憩ひる両個の行人あり。とんれど個ハ
年の齢五十だりの老女ふ。又一個ハ年紀廿だりの男ふあり。この
壮佼が老女を呼て。姨ぢとふ面新も。紙る所あれば姨任ふべ。伴ろ
老女ハ小妻木綿を。湿洋よ深る布ふの。裙るく端折ゆ。腰ふハ
さふ。紙包を拾ふ。ふ一條の竹杖をもて。又壮佼ふ。
木綿を標緯ふ深て紋のところ。白くぬ。る布子ふ。桜の雨衣を上ふ。
白桜の脚絆垢深て黄黒ふなりなるを。紙包を脇よ肩ふ。ゆくて

彼老女己者より曙明を。向黒とよびさりしが。黒き眼を顕して。瞋然と打笑ひ婦人ハ幼弱き令愛を携て。何地までか旅寺のよ。など従者をバ倶しなさいね。不知案内の者が合舟にハ。船霊の初穂。斯とふさものぞよ。廃莫。吾儕とも縁共よ渡しわたりに。はかばかしく斯ひ進らせんと。人の誘を旅にて。ハンある。とむかしの人の言の葉も。今さらおもひあはするものから。正首なる由も紛緩さなど。曙明ハ會釋して。いと同じも待りしかど。彼ハ故ありて後迄待り。今来や来べきところと。実の一分に回答をするを杜役ゆゑてうち笑ひ。それいと不便のことなりし。倫この出船に乗ぬ後また。明日も明後日も風よろしくバ。一歩も旅路へ立むとおもふなるべし。抑婦人ハ何郷より。何国へとて赴き給ふ。おはじくこの海上をも渡して。熱田にて後また一人を傑ひ給と。勧るにぞ。曙明嘆て然なり。行程おぼつかなき旅なるに。漂泊の伴侶なくハ。狭危を脱れがたけん。

杜役ハ同じ事ぞ。さらえて笑しつゝ孫と老女の伴侶にこそなりけり。眞に所之。まづ彼等を捆縛て。けふの出船に乗らんずや。とおもひけるが。うち点頭て老女に對ひて。只今彼人ハいうてど。けふの出船を遣ることハ。便宜に待ちばべつるへきで安濃の津より。この津の東へ赴くものぞ。こゝ致ど多き面へ渡せべ。鄙まる人艘待り。其処にて後また伴侶を得すん。おのハあれど。けふハ絶て一下さびしきの船よ乗ならたることなし。足なども人ならぬ身まで。あるのどいへど。老女ハ些もあらぬぞ。それいと易きことぞよ。ろうごとるらうち拝しつひ給ひとの顔をまんや船の出るとて。人噪しく罵るなぞ。曙明ハ止以子を将そ。彼老女のうと有も不忙しく茶店を出そ。杜役に携られ。猶て船にぞ乗よりける。かくて老女ハ正首に。曙明母子を慰つ。識て准陵やしろん折く菓子餅なども行嚢の中より出して。止以子に与へなんどするに物を獲て殊よ欣べ小児の生平て。止以子ハ老女と杜役を。

喜びし人なるに。忽地押て歎なとはじ。その枕に慰めて。曙明は終日の
水行を事ともせず覚えざる程に。船はその日の下晡に熱田の浦に着ければ。
人余はみなかちより船を乗捨て行く程に。曙明は彼老女に導かれて。夜寒
星崎松風の里を去りて。呼続の浜辺つたひに猶捷間に宿取ぬ。その
夜老女は真ならちて曙明に対ひて。いふやう。御同行もまつせし程に渡れたらば
宜しかりつらん。身の形勢を見て。粋の趣を推量るに。そはいと幼く儲りなし。
身の形るは。随に稚き女子也とは。ひとり旅をするかな。やおんぞうん錦を拵
山のおくなる婦幼と見るときは。人侮りて動もすれば。誑らかしたとすなるに。
左をえても右見ても。さらぬ旅宿に虚々と。徨従をするかはと危き
ことなきにや。我さへも従に伴侶になりて。おなじ宿りにありしも一樹の蔭。一河の
流れも。みな他生の縁なれば。いと痛しく思ひ侍り。往方もおなじ道なるべし。其処

まで送り進らせんとて。かく告ければ。と彼社役のことも心にいと叮嚀に
聞えければ。曙明は今更に遁果べきやうなければ。やがて心に憑しく喜ぶ人を
疑ふべき事もなくして。又雑が慰るもの。あはれべき向地なりと。頼めやと思ひ
ければ。やがて浅からぬ好意をよろこび喜えぬ。さてそのいふやう。実に推量せらるる如く。
わらはは近属良人に別れて。幼弱き女児をおきて。我の蒲原へ赴くものぞかし。
京洛は人とりけりしかば。旧里なるが物思ひ。我縁へ帰る方をしるべに。この老女
のいひとりうる。胸苦しく思ひ侍りとなへば。老女は小膝を摘て。呵々とうち
笑ひ。さるんまへそあなり。なほどて如此ことを告あかねそは。幸なることぞ
かし。吾儕も元来我後のものにて。良人は最早身まかりぬれど。一子は夫や
三十を越て。おん身が今弱きは年もまうしる孫さへ二三人あり。老て家にのこ
されば。新婦虐を人々いひなりて。猛に思ひたちて侘る社役一人を

いで伊勢太郎へまゐりて。賽の河原にて合船。不思議にめぐり逢ひて。今又ゆくへ同郷の人にこそあらはれ。ころ安くおもひなし軽尻馬の後方へも立せず。差つかへなく蒲原まで伴ひ進みけれバ。ここにいハ壮役も相ひそかに蒲原のよべハ新浮かさなれハ塩屋の赤塚鈴鳥屋の干潟ハ潮や満けんと浅からぬ値遇なりと打合槌の藁砧ゆきかふまでに甲夜をすぎて。旅宿ハひとぞ寒けれど。曙明ハさひもやけれど。この老女ハ旧里の人なりと悦しく。瀬による亀の浮木に遇ひ。雪の鴻なる撰子の日影に向ふに絶して。飲ぶに限りなし。こまでよりして彼老女ハ正首にゐなる。されどあいやよろこび。旅なりとそ婦人の身とさて壮役ハ寐ねがのぞとて経るさとこがら臥草をハ。次の間へ立ひ又朝からはや草鞋うち履げて。ほづるに曙明にここに気芽し。次の日ちり止奴子ならバ壮役と老女とかうり背に負て。ざまさくにかくうり歸へぬ。或ハ冬野に枯残る草の花を摘てとらせ。又ある時ハ果子の様なるものを購ひてとらせ。稍くも与しらバ。止奴子ハまめく老女に狎て。東の間も離れず。曙明ハこの形勢にこころひよく安堵て。一日二日とゆく程に尾張三河をすぎて。第三日に遠江なる天龍河の辺りまで来にけり。この比ハ河の瀬も今にかはりていと広く両岸にハ蘆荻高く生繁りて。水より南面ハ絶て見えず。冬の日影の短くて。町屋村なる比ハ下晡になりけり。當下壮役ハ娘に對ひて。天龍河ハ申なるてハ船を出さずと聞ゆるに。日ハ未だ西に傾きぬ。吾儕まづ河原にゆきて。おしらべてみんずやといへバ。老女ハこの義ゆもあるべし。それハ肝要のことにこそ。とく。といそがせバ。壮役ハ足に信して河原を投て走るに。ぞやがて候だれども。と待バ。曙明ハ徐々に四五町後れてゆく。程に河原のこなたのおどろし。両個の荒男さし對ひて流木の乾たるを攀て火を焼てあり。

越路の十兵衛
悪根を憑き
大天龍る母子を引勾る
あけぶの
ろう平

とりう子
とりう子

曙明を向黒みて指し耳語すどきけれバ足もやに過りぬ。猶て中流へ一
赴けバ。壮佼ハ二丁ばかりにて船を抗て拒しかぞ。老女ハ逆まに二丁ばかり余で。原来
いまだ遅からバ。とく運ばるべしとて脊肩なる止棹子を揺揚曙明をいそぎ
来て舟一汀渚よりはなれて見まさバ舟二艘よせてあり。余その左をとらぶれバ。
右手なる舩へのれ艫よりも乗んとしけれバ。津人推禁め須臾ハ瀬が
ゑやし。四五人ひとつに乗らくとゑ中流にて沈ハ随よ棹をとるにハ衞
なし。かし過失あるときハ後悔そこに達べからバ。よりてこの舩へ二人乗り。二人ハ
わかれて左手の舩へ乗りねとなり。曙明ハこのる余便なくハ思ふにあらず
艫よ出てかの艫よりこそ固辞べくもあらバ。吾儕ハここに乗らんとぞ老女が
脊に負ましたる止棹子をうれ取りて乗せんとするに推子の癖なれバ。老女の
肩にとりつきて縢せども離まじと渡く泣きなど諸共なるバ舟に乗ふじとぞく。

むつかるまでぞなし。老女も又この形勢に強て止棹子をおろさんともせず。吾儕
護して侍る上ハ過失さするとハあるべし。その津人ハ志かいい侍らんおんみ
侄の男とともにその舩よ乗ての「吾儕ハ彼舩の舟に乗なん」。さらばとて止棹
子を肩ゆる侭。左手の舩よ乗しかバ曙明ハ已ことを得ず壮佼よ扶けられて
右手なる舩よ乗る纔んで津人ホハ棹を取て。おのおの舩を出すと将よ。曙明が乗
けるハ。をんやにまで面へ之らんとすれども。老女と止棹子が乗る舩ハいまだ中流にも
到らズ。推流され如くに見えて。下流十町ばかりあなたの蘆荻の中へ漕戻して忽ち
見えずなりしかバ曙明大に驚きておれハいかにと問間にこなたの舩ハ岸へ着ぬ。
この時に壮佼ハえんじめて後方を見かへりて。わが嫂の乗る舩の跡なきに愕驚て
先舩の津人をよびとかへて其故を罵り向ふ津人も些も騒ず須臾の瀬のゑやし
さふ。わろく舩を取廻せバ流さるる也。必定すぐ来るべけれども後なるへ蘆荻に

携へて、かゝねをする人を志す。岸の方へ寄せて、人あるかんとのみをつゞけても曙明は、とゝく紀要ゝゝに日は暮るゝを
何時までか。こゝにあをぶべし。こゝもかくもして速よ、ひぐらしの安否をきゝゝして
こゞと涙とともに流れ口祝ぶ。壮夜は蹉跎して、洋人をいとく罵る。度なる私乃
流さるゝ汝は、ゝゝ去ぬ。再び棹を返る母して、ゝゝ
かせ、かさどや。とのゝ流れのみ、洋人は弟こゞと咳く。
私を漕ぎ出せ。曙明は彼私のこゝに出でも来つるとゝゝ、ひるく冬枯れて。
振くいなのよゝはと、ものよゝはしかとされ。早瀬の水も恨ゝく。袖絞るく
又舊の汀渚よ私をもせとゝ壮夜はさまゝくを曙明を慰て、猿て私より技
のゞ。三三町西のゝゝ、秀川ついふゝ。失くる私を索んよゝ、ゝを使ひくゝ
本末を、ゝゝふゝふゝ任ぶ。要時この処よをせよ。吾倘は河原を下流へ姨

令弱の往方を索てよやあふとも。あゝとゝ。暮果ぬ間よゝ、ゝ
学ぶうゝ私。とのひかけて、更よ腹を回して下流へ、ゝゝ
年を経ゝ。冬青の下ゝ立在て、ひゞ子の往方とひゝ。瞻る空ゝ、ゝ
稀なる冬の日の河風寒くゝ吹あれて、ゝゝ黄昏なるゝ。打こゝろけれと両
個の癖者。冬青の背ゝ立あゝられ送よ耳殺点沢さる。是則別人なるゝ。
衢ゝ曙明ゝ。この処を過りとゝ。道次ゝ火を焼つ、ゝゝ
耳殺るゝのゝ。ゝの癖者ゝ出て左右よゝ。曙明を
ゝ夾ゝ顔をつくゝさ、視ゝ。呵くゝとゝ
死ゝ白ひうせゝ。義濃の野上ゝ沈田へ賣ゝ。ゝ正月ゝ
来ゝ。とゝを反ゝ拝ひものゝ。曙明ゝ。吐嗟と叫び、ゝ
ゝゝ掻細て、背ゝゝ抱笛ゝ。一個の癖者面ゝ立て足をゝゝ

揚叫べど喚ども甘ぞ俛俸よりとさゝめきて長田のかたへ行てゆくなり。
夕暮て来る旅客が。天龍河をこえんとて外面もえせず河原に投て
歩の運びをいそがせば。癖者ホはおもはずも。彼旅客に突あたりて。曙明を
うち落し。齊一撲地と輾轉ば。旅客も六七歩。踉蹌ながら驚き怒り。
足踏駐め怯と見て。こは膽太き壁虎どもらかなり。ひとつの網を張て項のめぐりの
細かなる銭もはぶくや。何をするぞと罵るまゝに耳にもかけず。おまへを叫び
息ざれてよれるぞで。寄まする曙明を遽しく。擡き揚んとせられしかバ。
旅客これを見るにしのびず。走り寄て前に立さる。癖者が腸を擒と把て
引よせれバ両個の癖者大に怒て又曙明をうち捨て。左右より拳を
揚て旅客を打んとするを。左へ避し左へ外し。引かけて挫と投。組んと
まするを丁と蹴倒し。又とりつき着を敲き伏せ。足に携るを蹂躙ふ。手練に

おそれて癖者ホは。かなはじと思ひけん。曙明をうち捨て。背後をも
見ずして逃失けり。曙明は不意の人のまもりに将場の縺乃。列卒を
脱まぬかれして。旅客をふし拝み。何処の人なれば。我とど累に
難義を救せ給ふぞ。わらはが爲の守本尊。産神にてぞおはすらめとくいへば
旅客は莞尓と笑つゝ。劍法一手も知らぬ身も。舊里にありしとき門田に
水を灌さるとて足手に力を入れてゐたるほどに。小搦撲さへに見えてあるなり。
閑思君が益に立ちて。わたくしはいかなるまする働をせしとするかな。
さてもおん身は悪棍どもに。勾引されかけんとせられしハ。そもいかなる人ぞ
見えんぞ。同行はいかにぞや。といひつゝ顔をさしのぞかんとするに。あれ孫を
了見られ。それをそこは最寄に加茂河へ投しと嘆いる。妹早閑はおもはず
といへバ又曙明も。旅客を熟視て。現もおん身は舊里なる。何かの兄公

十数湯を飲。盗賊もワルカレそゞれ時。てゐて環金ンとハ。ちりひろけ
祓べ身の憂ふ。何ゝ中でも去ぐ去ぐ。「面目なし。」と伏沈め。十三歳
いよ〳〵疑ひ解ず。七年前の秋九月。六條の妓院ようぢん牙が傾城の
袖をひゝとく。叮嚀ふ賜り来されしゝが。実ゝ死せうと、ありひとりて。
過七の布施俳事。ゑびすりに菩提を吊ゝ。乾ぬ袖ふ露乃命。
恙なくてけゝこゝで。環會ふ故ゝそゝあゝめ。来落のかゝいその道も。
遠つ淡海の天龍河。とうんるハ冥土の三途河欲。これゝ死出の旅人ゝ。
たゝりたるゝとゝゝのゝぢゞ。ちん牙ぐゝを閉ん欲。ゞぐゝ〳〵を呑べき
扶同艶とゝふて多くもあゝゞ。妹ひゝろ見ひゝろ。死ゝろ妹が生てあゝ。
飲びゝ見ふ知ゝうゝさん。双千世の中ですゝひゝ。勝て固ゝるゝとゝ。
吾儕も人ゝハ越後ゝ廉ゞ。ちん牙が入水ゝろゝ。と泣きゝれゝ。

疾積ふ病體ひて。京洛ハ赴くゝるゝ。一年ゝ有ゝの茶餌ゝ味。
痩田もゝゝ賣尺ゝ。金のゝゝ苗ゝれゝど人参飲て首縊ゝ。と喩ゝれね
命凶。貧の病を療ゝぐゝ。医師ハ絶てゝる死世ゝ。主ゝゝて挽ん方の紙。と
ゝひ決て次の年。ある人の紙父ふ。武蔵の豊島ゝ赴ゝて。練糸の
向丸の小厨ゝとなゝて竟ゝ又。四年ゝ末廓ゝ遊ゝ。君紙ゝゝハ牙ゝ。
律糸一扇ゝ得ゝとなゝて。彼ハ馬ふ乗ゝのゝゝ。この春ゝ。母屋の傾ふ
別宅ゝゝ。毎月ゝ廓ゝ遊ゝ。ゝ絶ゝ俳ゝ。ゝ紙方の蔭ゝ。雲ゝ緑ゝ
ゝひゝ。吾儕ゝゝ。殊ふ不ゝ。ゝ。吾儕ゝ紙
方十ゝ紙ハ。先主人の弟ゝ。ゝ。稚ゝ。ゝ子ゝ。ゝ育ゝ。ゝ。
ゝく人の風声ふ吹けべ。先主人一八どの。組糸織物買入ゝ。年ゝ
糸のゝゝ。ゝ。六條の妓女ゝ。閑澤ゝ。女房阿或どの紙雑別。ゝ

ひとりあり。けん天文元年九月十七日の夜、件の娘女を携へ、
賀茂川へ投げ捨て、一子なる綱五郎どの、僅か年七才なり。主人乃ち
十七歳どの。慶見をもて、やく〻ふ豊満なる糸店衆。そう留られたると
時月八つぶ妹の入水のその夜と一点ぶんぶ。さそく現在の主人の兄公を。
つぶ妹ふ忌心溺して。のち共に死ひ。独と点ぶ人ふ告られど。主人
ちゃくよりもなほとひとり傷痛さのこと。新よ今年九月八。先の
主人一八どの。七回忌ふ當るなり。殺人に成あり。家ふて身ひとり自ひ。
和殿来給ふ赴ひて。ちゃくぶさ蘭若ふて。追善の仏事を修ひ。墓表
を立ふ。と叮嚀ふ親方十〻他どの命さるまひく。八月の下旬武蔵を
起ひ。九月の晦日まで。二條の旅店ふ逗留。一八ぬ。のるべさらなり。
九月ぶ為ふ経を読。石を彫墓を修理。十月の中旬ふ来路を歩く

高野へ登山。大和をめぐり。伊勢へ詣てさら海。途よ山ん賊ぶ危
難を救ひて。ちゃくぶる射面へ。今ふ母義のとちと。絶ちもなく
物ちくれば。曙明へ笑ふ。只面ふて喜ふ。且て弘法様ふ
存命なること。さぞ嬉〻〻ぶ。一夜とまりの高水ふ。ちゃくぬ
水へひとりあそ。誓ひふ背ち情るく身を寝まそその人なのこ。投ち
とるとひあひそ。面様〻の事ふ。コぶ身ひとりぬちるく。伊勢ふれ
旅人ふ助られ。ちゃくなく家ふ伴ま。死後まそへさまぶふて。故郷へ信せん
るも。新護さん然止つ。竟そそれなりふその人ふそして両個の女児を挙。
憂兄年月を送るかひる。仇一夫ふ飽ま。科ふ死の代鬼〻〻
次女ふる止ふ子を属て。逐ぶさされて孤ぶ家ふ。ひけまべ十す境。身ふ
曇る涙の雨。帰る里なのこ。あてふ。其処とも志べ呻吟つ。ゆ〻〻

悪棍ホ
を鞫問
し
止水子が
住方を
孔明さ

村長

千兵衛

出目次

曙明を
いわて
千兵衛
豊嶋へ
帰る

来給ふ。津人そらんじても。老女壮佞両個の約人伊勢へ預て越の州へ。
ゆくといふよ伴ま一日二日と来る程よ彼れの大河をつたとそれ。女門人
止水子を失ひつ。つくんとてふ捐られてぴとでせんさぐるれ打ろう。悪棍等が
いで来りて。矢庭よりつくんを引拘掇攫ひて去んとしてふ打よりく家兄が
抜ひ出ひてつゞ身ひそのようさぐあれどもと惜れ止水子ろう。年も僅ふ
六ろんべ。さぐ東西も志ゝ女子ぐ又よ乗られ母よ別ま。今霄へいふあ
らん失まさる緯の頼如此さくるりと一五一十を涙とりふ芸一くべ十兵衛
吟てうち驚れ。その老女壮佞も世よいふ虎落護摩の灰ちるぐさぐ
る悪棍ろらん。我ぐぐ越後へゆるりのぐ伊勢ようとまでれべよあらぐ。
日ハんも暮て霄闇ろるふとふつんあそ長食後ぜべいぐふ更闇ろ村長
緯赴きそ。今夜厳〻く穿鑿さも。彼悪棍一両人を速よ拘ろべ。好が徒方も

志ろべさん。誘ひ出。といそぐして。曙明を誘引つ。河原よ属る村長ぐ
宿所よ赴き。縁由を告よけれべ。村長ぐてうち驚れ。都鄙とろく。彼此
とろく。年末合戦止とれるけれべ。公文よあ〻べ〻て。天龍のつて舟ハ申を
限りて出そろなり。緯の頼を考ろふ時刻大れよ後ま。そハ真乃
津人ハあぐうぐ速よ穿鑿さべ。と為つ。曙明ハ悪棍ハ骨相
模様を問定め。俄頃よ津人ハを呼集合て。清息を礼明ま。その夜乃
中ハ方へ部して彼悪棍ハを索る行よ。緯旦荘客ぐぐ。津人のろとも。
息杖津久八鶴骨出月久。痩鞍雲珠三といふ悪棍三人を搦捕て。村長
緯れて来れ。そのとれ村長ハ曙明ハ彼ハを見さるふ。雲珠三津久八と
喚做りのハ河原のとろ。冬青の下ハ曙明ぐ立在るとれ矢庭よ引攫ん
ぐて。十兵衛ハ殺ぐ悩さん。迷失さるものどもと。又出月久と喚做れ曙明

と壯佼を私ホ為て天龍を渡せーりのホ紛れるのけれべ。村長ハ件の惡棍も紙いと〻谷ーて支黨の往方。止刄子が存亡を鞫問せるホ。惡棍ホ陳じていふやう。某ホハ假初ホこのまれる野ふせりこ。件の佼倆の張本ゝ。彼老女と壯佼ゐれとも。彼ホハ元ホ為る人ゐ〻移べ。名を何と喚てゆん。住所も絶て吟るゐ日。又老女と雛子を率て。私を隱ーゐるのゝ。近ゐ相摸より来れる。小馬栗とふのゆて。件の老女壯佼と。豫てあひ識れるのこ。某ホ三人昨日小馬栗より共ゐ寒を凌ん爲洛北より火を燒て居ゐれ。件の壯佼ゐれ。小馬栗ホふゆゆう。曩ホ楽谷の津より。箇樣ゝの品物を携ひ来れり。汝ホ洋人ゐ打扮て。如此ゝホゆゆれ又ゐんみを欺きて。奪ゐべ。汝達四人ゐ中。二人ハ残りとゞまりて。件のをんなを紙ゐ攫ひ。富田林へ拉入れよ。ゆれ又背より彼ホへいゆ。

よ已く直段を定めゐん。些捫枯の花ゐれど。賣べ二三十金の物ゐあり。又小女兒ゐハゐゐ姉を附てゐくべけれべ。ゆゆ〻ーさんれのゐゐりの業内ホ疎けれべ小馬栗ハ姉ゐとたきけて早く亡よ。とりひつゐ。ホ辰ハ彼壯佼と。ホ馬栗ホよわゐぎれべ。往方をゐくべとゐふ。ゐゐくべ彼小馬栗を捕よとそ。又彼ゐを渉獵とも。彼ゐ所在ハさゐゐ。老女壯佼ホハ止刄子をれて化沈去けん。れ之ゐゐゐ為ゐ絶てゐけれべ村長施て綜の姦を遠江の前司保ゐゐ〻ハ祈て。出見み雲珠ゐ津久ハを進ゐせーゐべ。再く鞫問せゐゐホ。積悪脱ゐホ呼ゐて。彼悪棍ホゐ人ハ竟ホ首を刎ゐれゐ。さゐれどホ十吾郎ホハこの件のゐホゐ〻百ゐゐ。ゐゐ逗留ー。綜の顛末をゐるのゐゐべ些ハ怨を報ふとゐ人とも。止刄子ゐ往方ゐれざれべ曙明ハゐホ。ホ涙の乾く隙もなし。十吾郎大ホ已を諫く。潺ゐ物ハ矣ホとあり。別て後ホゐゐあり。譬べ付れとゐ身の如。ゐれハゐ身と死せりと

なひおん身ハこれを舊里にあらんとのこゝろにて越路を捘て東へ赴き。こゝにて環會なく
人の智をもて豫てより量らんとすとも測るべんや。親子の因縁渇きりせバ必ある時ハ
ありなんや。さるを幸ひこの春より。母屋の傍に別宅をかまへ直子武義へ譲ありて親子
十干ひとつの八年来癈病なる疲りて女房といふものなく。廓の介に住子と小廝のみを具して
古衣の解洗ひに使ひ給ひのミおん身よりも母屋へいかなく。ことごとの書費をたすけけるが。
一八ね所に後れたる。罪障を贖ふすべもが。これにすみしと思ハあるざ。花洛にありし日のこと
などハ人にもかたらざりしが。曙明とらそんも憚あれバ。只舊名の旦閑となんよびなしける
なひぞと叮嚀に説諭せバ曙明ハ今更に兄が縁しに繋れて死を許され彼嫖客
の豊浦の家に赴くこともこれ脱れぬ因果にてこそと思へバ固辭なる推辭もせず。十五歳に
誘引れ。武義を捘て赴く程に日を經て豊浦の芝濱へぞ著にける。

絲櫻春蝶奇縁巻之二終

本伊